

小野町の豊かな自然の中で

B&G「親と子のふれあいキャンプ」開催

8月3日から5日の2泊3日で、緑とのふれあいの森公園でB&G「親と子のふれあいキャンプ」が開催されました。

このキャンプは、B&G財団主催、日本財団・(財)小野田自然塾の協力により実施したものです。「日常生活では体験できない多彩な自然活動プログラムを通じて、親と子が協力し、話し合い、親と子の絆を深める」ことを目的としています。

今回のキャンプの参加者は親子8組16名。午後1時から開講式がおこなわれ、穴戸町長、B&G財団大島康雄常務理事、小野田自然塾小野田寛郎理事長があいさつをしました。



開講式後、小野田氏の講演を聞きました。講演では、なぜ小野田氏がキャンプを通じて子どもたちの健全育成に関わろうと思ったようになったのか、そのいきさつから最近の親子、学校、社会について話をされました。

特に最近の子どもたちが起こす事件については、「学校が悪い、社会が悪いといわれているが、誰も親が悪いとは言わない。しかし、親には責任があります。自然の中で、子どもの限界に挑戦させれば、たくましい勇気のある人間に育てることができ、その活動の中で、感動を覚え、他人の得意な面、自分の不得意な面を理解する。そして、自分の本質を見つけ出し、将来の姿をイメージできるように。子どものうちにいろいろな体験をさせないと、将来何をやりたいか見つけることができないのです」と、家庭と自然教育の重要性を指摘していました。

参加者のみなさんは、ルバン島での生活と、20年以上にわたるキャンプを通じた青少年育成活動での経験を基に熱く語る小野田氏の講演に真剣に聞き入っていました。

講演の後は、みんなで力を合

わせ、テントを設営しました。テント設営後は、夕食を作りしました。決められた食材をもとに、何をつくるか班で相談し、調理をしました。



夕食後は、ナイトウォークを行いました。キャンプ場のすべの明かりを消し、夜の暗さに目を慣らします。真っ暗な森の中を「ケミ虫」と呼ばれるホルタルの光に似た小さな灯りだけをたよりに、たった一人でゴールを目指しました。このプログラムは、小野田さんがルバン島のジャングルで真っ暗な夜、足の感覚だけで歩いた経験をもとに考案されたプログラムで、決して肝試しではありません。こ

のプログラムを通じて、普段の生活では気づくことのない、自分の持つ光に対する能力を知ることができました。

翌朝は、6時から朝の集いを行い、朝食の準備に取り掛かります。朝食はパンですが、各班ともサンドイッチをつくりました。また、飯ごうで飯を炊き、昼食のおにぎりも一緒に用意しました。

朝食後は、ロープとのこぎり、ナタを駆使して、竹のいす作りを行ないました。



11時からは、キャンプ地から約1キロのところにある東堂山まで尾根づたいに歩いてハイキングをしました。

ハイキング後は、休憩をはさみ、夕食の準備をしました。この日の夕食は「サバイバルゲーム」です。これは隠された食材を、各班で探し出し、獲得した

食材で夕食を作ります。食材を探し出せなければ、夕食は食べられません。各班のチームワークが問われるプログラムです。各班とも、ハイキングの疲れを忘れお米やおそばなどの主食を探していました。

最後の夜は、キャンプファイアー。炎が明るく、周りを照らしていました。

最終日の朝食はできるだけ、短時間で、できるだけ洗い物を出さず、そしておいしいものを作るのに牛乳パックを使ったホットドックを作りました。作り方は、パンをアルミホイルで包み、牛乳パックの中に入れ、火をつけるだけです。牛乳パックにある口ウが程よい火加減となり、ホットドックの完成です。朝食後は、テント撤収と掃除を行ない「親と子のふれあいキャンプ」の全日程を終了しました。

